



クローン育成物語

-ゼリーガール凌辱-

私はあの日、自分が生きる意味を見出した。

私の人生は「彼女を生き返らせる」そのための人生だ。



私は毎日研究を続けた。

本当は相応の機関で研究を行ったほうが効率が良いというのはわかっていたが、それではダメな気がした。

綾子は私だけの手で、私によって生き返らせねばならなかったのだ。

懐かしい夢を見た気がする。私は上体を起こすと巨大な水槽の方に目をやった。

緑色のぶよぶよしたゼリー状のものが蠢いている。

これが綾子の肉であり、内臓や脳や骨も正常に生成されていた。

しかし、その形状を保つためには常に高速で細胞を複製し続けなくてはならず、十時間以上外に出しておくとも自己崩壊して死んでしまうのだ。

だから定期的にこの培養液で満たした水槽に綾子を戻さねばならなかった。

先日、私の夢は成就した。

研究の末たどり着いた理論により、綾子の髪の毛から取り出した遺伝子を使って綾子の胚を生成し、成長させることに成功したのだ。

しかし、この実験が成功するに至った最後の重要なピースは私が知り得る領域の遥か外で発生した偶然（奇跡）であり、再び同じようなクローンを作ることは不可能に思えた。

私は筆筒にしまっておいた「綾子の制服」を取り出し、それをテーブルに置いてから水槽に近づく。

「綾子、おはよう。」

「アー、アーオ……。」

綾子が死亡した時点での年齢まで肉体と臓器は成長させているが、何も学習させておらず当然綾子の記憶があるわけでもないの
で、言うなれば頭脳は乳児、身体は大人なの
のだ。

そして私はこの「綾子の形をした乳児」がたまらなく愛おしく思えた。

「綾子、水槽からでるよ。」

「ウー。。。」

綾子の手を引くと、もう片方の手を水槽のふちにかけた。そして足を上げ水槽をまたぐような形で出ようとする。

綾子が床に足をつくると、その周辺に「体液」が飛び散る。私は気にすることもなくそのままリビングまで誘導した。

私は万歳のポーズをし綾子にも真似をさせ、
そうやって綾子の制服を着せてゆく。制服
はすぐにズブズブに濡れてしまいが、この
体液も「綾子」なのだ。

制服を着た姿は、まさに私が愛した綾子だ
った。

綾子は少し嬉しそうにスカートや制服を触
っている。

ドクンと血が滾る音が聞こえた。

気づくと私はその場に綾子を押し倒していた。

「アウー！アー！」

綾子は驚き、じたばたしている。

「少しの間我慢してくれ。愛してるから。
なっ？」

そう言ってゆっくりとロづけをする。

綾子は訳が分からなそうな目でこちらを見ているが、私の真似をし口を開け、舌を入れてきた。

舌を通して綾子の体液が口の中に入ってくる。頬を膨らますほどに口の中が体液で満たされたころ、私は綾子の唇から離れた。口一杯に含まれた体液をゆっくりと嚥下する。

少し生臭く、味はしょっぱい。どろどろと粘度が高く喉の奥で引っかかっている感じがする。

しかし、綾子の一部を呑み込んだことで興奮が最高潮になり、すぐに下着をずらし陰唇に押し当てた。

綾子は怖がっている様子だが、ためらうことなく無理やり捻じ込んだ。

「イーーーーー！アーーーー！」

ズブズブ

じゅわん

当然処女ではあるが、表面から膣内までヌルヌルなので少し力を入れただけでズブズブと呑み込んでいった。

しかし、綾子は突然襲ってきた謎の痛みに喚いている。普通の人間と同じように痛覚はあるのだ。



「ごめんね。ごめんね。すぐ終わるからっ」
「ウウウー・・・」

挿入した状態のまま、頭を優しくなでて宥める。

表面は少し冷たいが中は温かい。

私は神経をとがらせ、中の様子を探ってみた。



この膣肉、間違いなく綾子だ。

ギチギチにペニスにしがみつくと膣の様子を、半透明な下腹部から観察しながらそう確信した。

グニゅ

グニゅ

ミチミチの膣肉からペニスを引きずり出し、
また一気に奥までこじ開ける。

「イイー!!! イーッ!!!!!!」

ズ
グ
グ
ッ

ず
に

く
ちゅ

グ
チュ



乳房を掴むと指先がずぶずぶと沈んでいく。そして一センチほど沈みきると、肉体の密度の高い部分に行き当たり、それ以上は中に沈まなくなった。

ぶ
ぶ
ぶ
ぶ
ぶ

綾子は特別な反応はしていないため、表面のゼリー状の部分は痛みは感じないようだ。そうと分かると手を開いたり握ったりしてぶちゅぶちゅと指の間から漏れ出す粘液の感触を楽しんだ。

はじけ飛ぶ体液が辺り一帯を緑色の粘液で汚していく。それは何者にも侵せない私と綾子だけの愛の巢を形作っていくように思えた。

我を忘れて無我夢中で腰を打ち付けていたため、気が付くと口の中一杯に唾液が溜まっていた。



ぐに

ぷち
ずん

ばん

スちゅ

ぷちゅ

パン

ばん

ぼちゅ

パン

ばん

綾子にロづけをし、舌で唇を押し開け唾液を流し込む。

「ンウー。。。」

ぱん

口を離すと、綾子はゆっくりと唾液を味わい、先ほど私がしたように呑み込んでみせた。

ゴブ

ゴブリ

ぱん

ぱん

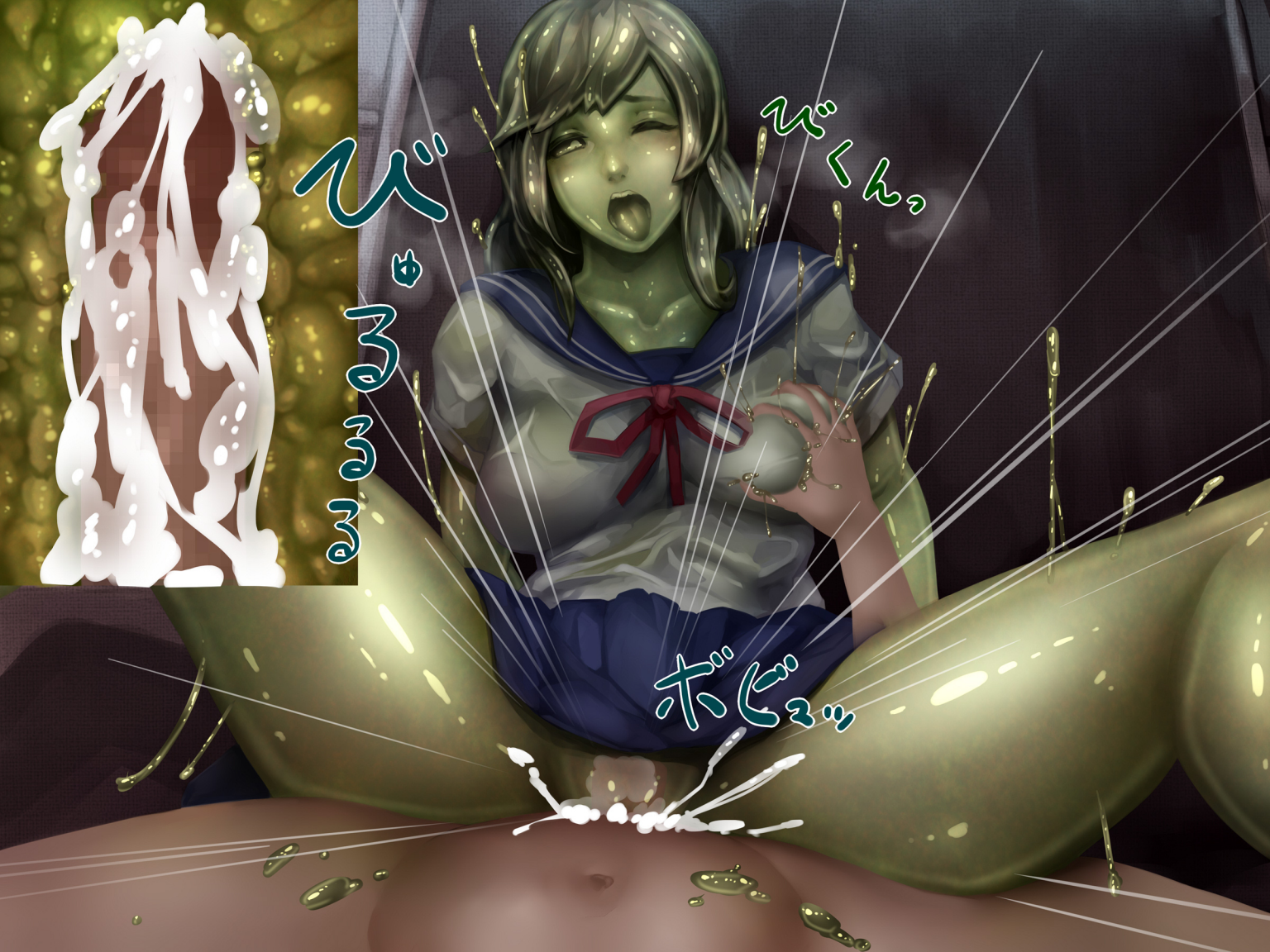
ぱん

その様子を見ると一気に射精の気配を感じ、慌てて腰を早めた。

「はあああっ イクイクイク！出すよ！」

「ウツウツウツ。。。」

ぱん



びびん

びびん

びびん

充分に射精した後、ペニスを引き抜くと精液と綾子の愛液、そして表面の粘液が混じったものが溶けたチーズのように糸を引いている。

は

は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

トポ

コブ



もっと直接的に綾子の感触を味わいたいと思
い、スカートと下着を脱がすことにした。

もに

むに

そして四つん這いにさせ、あらわになった
尻を揉みしだいた。



「うー、うー。」

膣に指を入れてみると、コポコポと音を立てて精液と緑色の体液が混じったものが逆流してきた。

ツプツプ

トコ

私はその蠱惑的な粘液を口に含み、飲み干した。

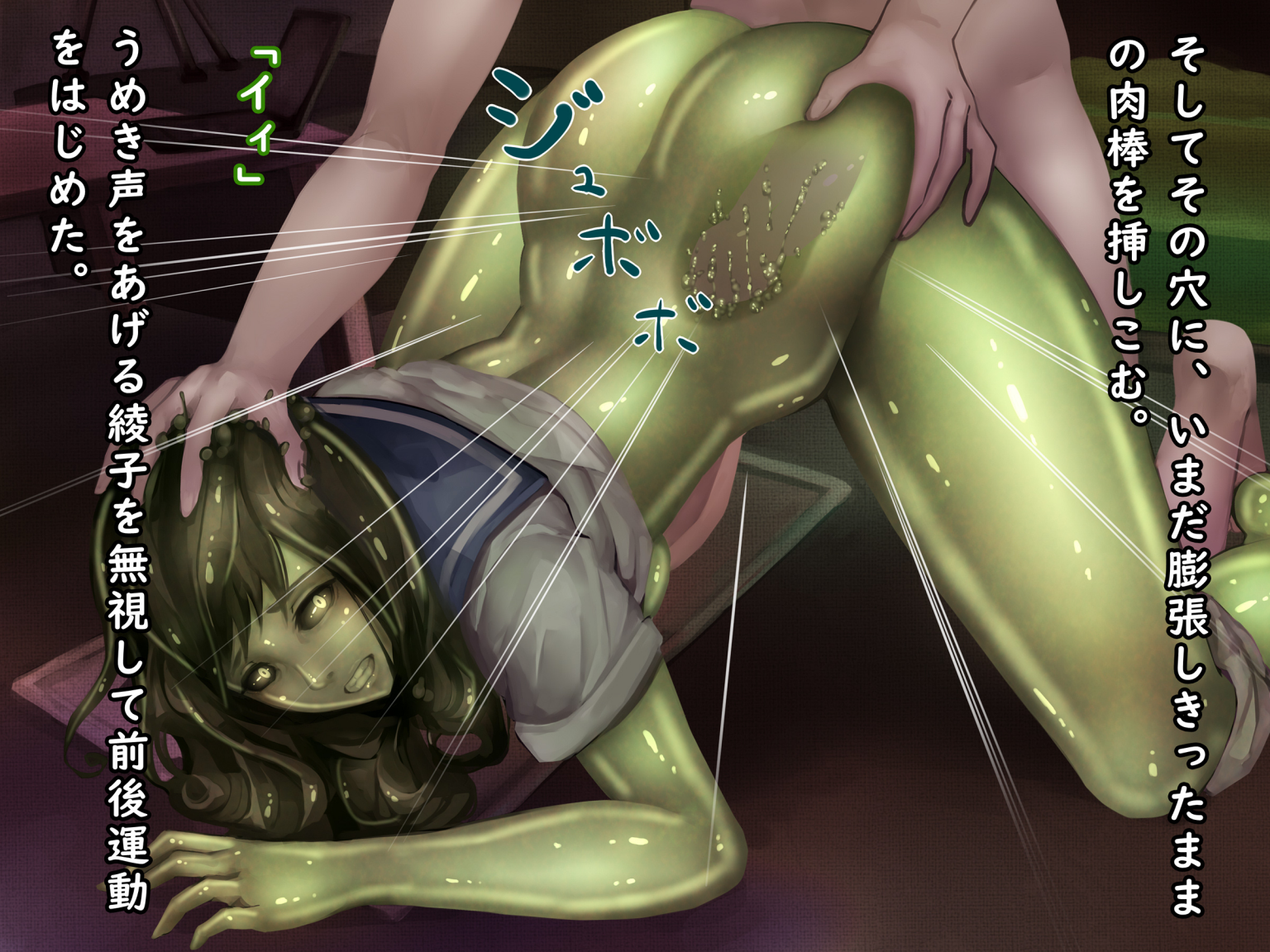


そしてその穴に、いまだ膨張しきったままの肉棒を挿しこむ。

ジュボボ

「イイ」

うめき声をあげる綾子を見無視して前後運動をはじめた。



バックで突いたときに亀頭に擦れるつぶつぶ。これもやはり綾子のそれだ。ここを強く擦り上げると綾子はすごく喜んでいたが、今の綾子はまだそうもいかないようだ。



ズッ
グッ

夢のようだった。22年間ずっとこの日のことを思い描いて生きてきたのだ。ペニスに伝わる快感も、またこうして綾子とセックスができることもうれしくて仕方がない。

ズパ

ばち。

ブッ

ぱん

じゅ

自然と腰の動きが早まってきた。

ぱん

ぱん



まだ痛がる綾子には申し訳ないという思いは少しあるが、その気持ちでは目の前の快感を止めることはできない。頭を押さえつけ、尻を力強く鷲掴みしながら乱暴に腰を打ち付ける。

はち
ズッ
ぱん
むぎ

バチ

パン

「はあ、はあ」

ぱん

息が苦しくなってきた。さすがに若いころのようにはいかないようだ。

ぱん

「これからずっと一緒だ。死ぬまでセック
スしようね。」

「せ、クス」

そう口に出して誓い、こみ上げた思いを子
宮口に押し付けて放った。

ぱん
ぱん

ぱん

ぱん

じゅっ

じぶ

ぱん

ぱん

ぱん

ぱん

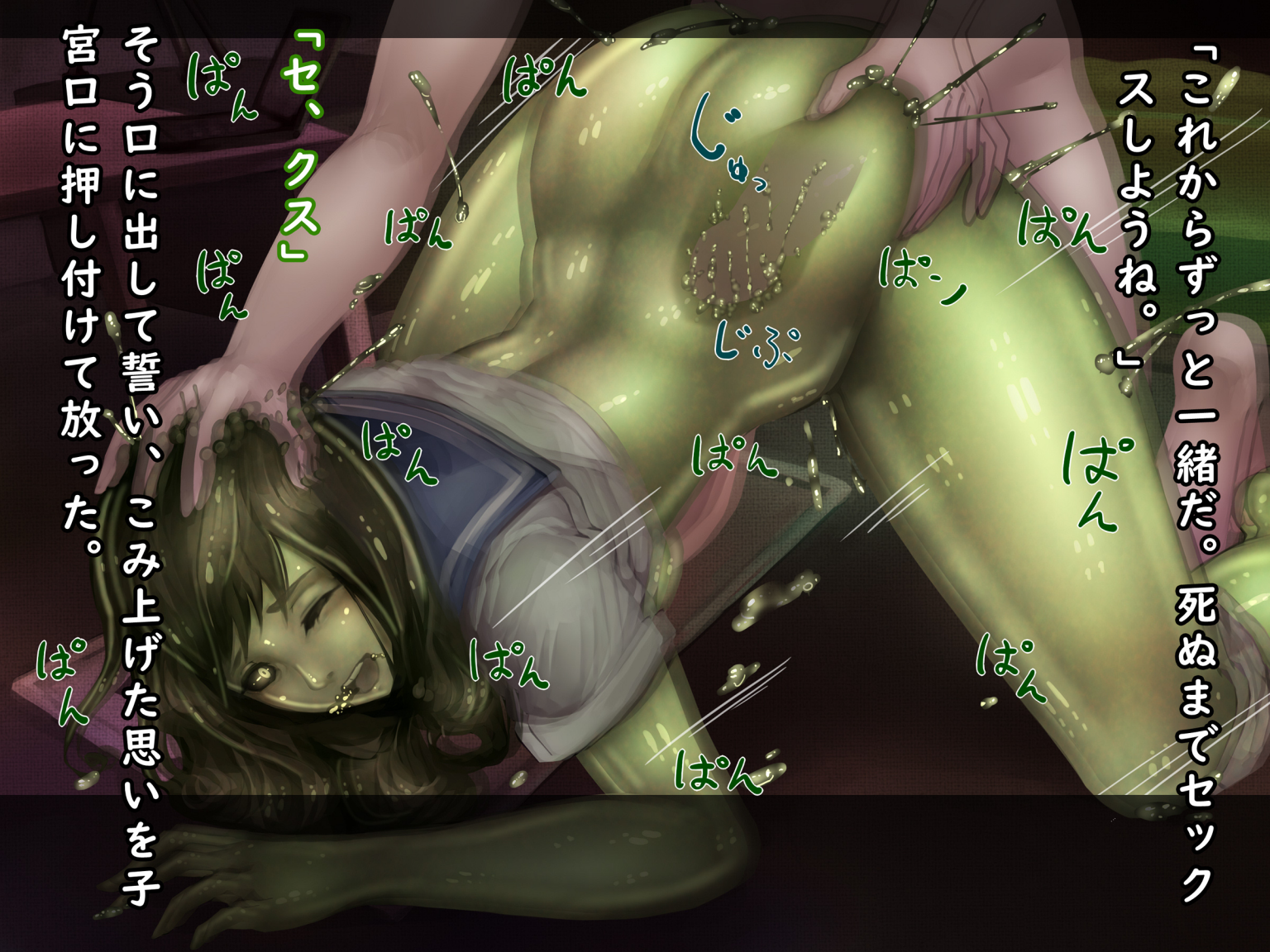
ぱん

ぱん

ぱん

ぱん

ぱん





ドボボボ

はびっ

私は綾子の体内に放たれた精液が滞留する様子を見つめ、幸福な気分を満たされた。

